

韓国語感謝場面における応答ストラテジー
—釜山地域の大学生を中心に—

**How Korean College Students Respond When Receiving Gratitude:
Linguistic Strategies for Expressing Gratitude in a Korean Speech
Community**

呉恵卿 (OHE, Hye-Gyeong)
国際基督教大学教養学部
金明熙 (KIM, Myeong-Hee)
駿台外語&ビジネス専門学校

Abstract

When a person feels indebted, expressions of gratitude are performed in an effort to readjust the balance in the relationship between the interlocutors; they employ linguistic strategies to deliver their feelings in the appropriate ways to fit the norms or rules of communication in their speech community. That person needs to consider various factors such as the degree of the indebtedness burden, the relative degree of intimacy and the speech situation. Previous Korean literature concerning gratitude situations, however, has focused on how to express gratitude but has ignored the response to the expressions of gratitude. This research focused on how speakers respond to expressions of gratitude in the Korean language and culture. It analyzes the DCT (Discourse Completion Test) data from Korean college students paying attention to how Korean people interact in speech situations of gratitude from the perspective of linguist strategy. DCT analysis shows that depending upon elements such as intimacy, age or social status, degree of indebtedness, Korean college students adopt a variety of linguistic strategies to respond to gratitude. This study can help learners of Korean choose and perform the appropriate linguistic strategies without fear of pragmatic failure.

1. 本稿の目的

感謝の気持ちを感じる相手にお礼を言うことは、人間関係の構築や維持のための重要な行為である。感謝場面における言語行動は、感謝する側に負い目が発生して人間関係のバランスが崩れた時、その均衡を再調整しようとする努力の一環として行われる行為で、場面や状況に合わせて様々な感謝表現を戦略的に駆使して調整を行う。一方、感謝された相手側も自分の負った負担の程度や相手との関係などを反映し、相手からの感謝表現に対して応答をすることになる。しかし、社会文化的に適切とされていない表現を使って感謝に対する応答をした場合、誤解が生じてしま

How Korean Students Respond to Gratitude

い、相互コミュニケーションは語用論的失敗につながる恐れがある。韓国語の感謝場面におけるこれまでの研究は「感謝の表明」に重点が置かれており、「感謝表現への応答」はあまり注目されていなかった。本稿は、感謝の挨拶を交わす場面で、韓国人人々がそれぞれどのような言語表現を駆使しているのかを、「感謝表現に対する応答」に重点をあてて分析及び考察を行い、韓国語学習者が適切な言語表現を使ってコミュニケーションができるよう手助けすることをその目的とする。

2. 先行研究

韓国語における感謝への応答を取り上げた研究は最近になって少しずつ出てきてはいるが、その数は非常に少ない。Bak(2000)は、韓国人話者と英語圏の韓国語学習者を対象に韓国語における感謝への応答表現を比較分析し、韓国人話者は年齢や社会的地位といった社会的要因を反映して様々な談話ストラテジーを駆使するのに対して、英語圏の韓国語学習者は、状況や社会的要因などを考慮せずに、「괜찮아요.(大丈夫です。)」や「천만에요.(どういたしまして。)」など、韓国語教材に書かれている表現をドリル方式でそのまま暗記して使う傾向にあると述べている。韓国人話者を対象に DCT(Discourse Completion Test) による調査を行った Kim(2016)も、談話ストラテジーの観点から社会的要因を取り入れた分析を行い、韓国人は感謝に対する応答として非言語行動を含めた様々な表現を戦略的に駆使していると語っている。また、Pyun(2007)では韓国人母語話者によるコーパスとドラマ、市販の韓国語教材を題材に、感謝表現に対する応答として使われるとされる「아니예요(いいえ)」、「천만에요(どういたしまして)」などを含めたいくつの応答表現についての使用頻度を調べている。その結果、コーパスとドラマでは殆ど使われていない「천만에요(どういたしまして)」が、韓国語教材では 7 割を超える割合で現れており、教材が実際の感謝場面で行われる言語使用をあまり反映していないと指摘している。

以上、韓国における感謝に対する応答に関連する研究を概観したが、現在教室で使われている学習教材は実際の言語使用を十分反映しておらず、これに関連する研究もあまり行われていない。特に、これまでの研究は感謝の場面や状況など、談話ストラテジーの選択において重要とされる要素はあまり反映されておらず、具体的な記述や分析が行われていない。従って本稿では、韓国語における感謝への応答についてこれまでの研究を発展させる形で、社会的地位、親疎関係、負担程度などの社会的要因を考慮した DCT を韓国人大学生に実施し、場面や状況に応じて、感謝表現に対してどのように応答しているのかについて分析を行う。

3. 調査概要及び DCT の構成と内容

3.1 調査概要

韓国人大学生は感謝表現に対してどのように応答しているのかを調べるために、DCT による調査を行い、特定の状況における表現方法を自由に書いてもらった。DCT を使用する場合、実際の会話と記述に差異が生じる場合もあり、現に非言語表現は含まれない傾向がある。そのような短所はあるものの、DCT は物理的、時間的な制約を受けず行うことが可能であるという利点がある。本研究ではいくつかの変因を制御するなど研究方法を変更し、短期間に大量のデータを収集するために適した方法を採用した。

データ収集のために 2017 年 6 月 12 日から 6 月 23 日までの 2 週間にわたり、釜山に居住する韓国人大学生 40 人を対象に DCT を実施した。年齢は主に 19~24 歳で、40 人のうち 29 人が女子学生、11 人の男子学生であった。

3.2 DCT の構成と内容

DCT の内容を構成するにあたって、感謝表現が行われる場面や状況の設定については Coulmas(1981)の「感謝の対象(the object of gratitude)」を参考にした。Coulmas(1981)では、感謝表

How Korean Students Respond to Gratitude

現の選択に影響する要因として「感謝の対象」をあげている。言語手段を通して表れるすべての感謝表現は、恩恵を施した人によるある行為又はその行為の結果と関係がある。Coulmas(1981)では、これを感謝の対象と呼び、それぞれ異なる4つの場面別カテゴリに区分している。なお、各場面は、(1)感謝表現が使われた時点、(2)感謝表現が使われた状況、(3)感謝行動における依頼の有無、(4)実際受けた恩恵の有無などに分けられており、各状況はさらに2つに細分化されている。まず、(1)感謝表現が使われた時点については、感謝行動に対する「事前の感謝」と「事後の感謝」に分けられる。事前の感謝とはあらかじめ感謝の言葉を伝えることを言い、事後の感謝とは実際行われた感謝の状況に対して感謝表現を使う場合である。例えば、ある行事に招待を受けた場合、招待を受けたその時点で発話された「초대해 주셔서 감사합니다. (招待してくださりありがとうございます。)」は事前の感謝に当たり、実際に行事に参加後に発話された「초대해 주셔서 감사합니다. (招待してくださりありがとうございます。)」は事後の感謝に当たる。次に、(2)感謝表現が使われた状況は、贈り物のような「物質的なもの」に対する感謝なのか、それとも相手側からの褒めや情報の提供など、「非物質的なこと」に対する感謝なのかに分けられる。(3)感謝行動における依頼の有無は、特に依頼していないのに「相手側からの好意」で恩恵を受けている状況なのか、それとも「自分の依頼や指示」などによって恩恵を受けた状況なのかに分けて場面設定が行われている。最後に(4)実際受けた恩恵の有無の場合、レストランでの接客の場面などで機械的に発話される「ありがとうございます。」のように、実際には恩恵を受けていないのに発話されたものなのか、それとも実際相手側から恩恵を受けて発話されたものなのかによって分けられている。本調査では、相手側の行動やその行動の結果により恩恵を受けた人が感情的負債を感じて感謝表現を伝える状況のみを対象にしているため、(1)まだ具体的な恩恵を受けていない事前の感謝や、(4)接客のようなサービスの場面で習慣的に発話される表現は外した。そして、実際相手側から恩恵を受けて発話される事後の感謝を前提条件に、(3)物質の提供又は非物質的な行動に対する感謝、及び(4)相手側からの自発的な好意あるいは自分の依頼などに対する感謝を参考にした。

但し、本稿では感謝表現ではなく、その応答に関連する調査であるため、(3)「物質の提供又は非物質的な行動に対する感謝」は、(3)「物質の提供又は非物質的な行動に対する感謝応答」に、(4)「相手側からの自発的な好意あるいは自分の依頼などに対する感謝」は、「自分からの自発的な好意あるいは相手側からの依頼などに対する感謝応答」にそれぞれ置き換え、感謝応答の状況を<表1>のように「場面 □」と「場面 □」に分けた。感謝の状況は、調査対象の特徴を想定し、大学生の日常生活の中で想定可能な感謝場面を設定しようと心掛けた¹。

<表1> 感謝応答の場面

場面 □	物質的なものに対する感謝応答	+	自分からの自発的な好意に対する感謝応答	⇒	自分からの好意による贈り物、食事のご馳走、お礼の食事のご馳走をした場合
場面 □	非物質的なものに対する感謝応答	+	相手側からの依頼などによる結果に対する感謝応答	⇒	相手からの依頼で助けてあげた場合

さらに本調査では、同じ場面でも社会的要因が感謝ストラテジーに与える可能性を想定し、上記の「場面 □」と「場面 □」を「社会的地位」、「親疎関係」、「負担程度」(Brown & Levinson, 1987)の3つの要因に分け、<表2>のように全18問のDCTを作成した。なお、「場

¹ 韓国では授業時間に学生が教授にコーヒーや小さな菓子を渡したり、親しい友人や後輩に負担とならない範囲で食事をご馳走したりすることは珍しいことではない。また、親しい間柄だけでなく親しくない間柄でも、お世話になった時に感謝の意味で食事や飲み物などをご馳走したりする。

How Korean Students Respond to Gratitude

面 □」では負担程度の社会的要因を外しているが、これは本調査の対象である大学生の場合、物質的に負担となるような行為を施すことは難しいと予想されたためである。Brown & Levinson(1987)では、各文化の特殊性を構成するものとして、(1)社会的な権威、(2)社会的距離、(3)負担程度といった3つの要素をあげている。社会的な権威とは、社会的地位の上下関係を、社会的距離とは話し手と聞き手の親疎関係をそれぞれ意味し、負担程度は話し手の発話内容が聞き手にどれだけ負担を与えるのかを指標する。その他、性別や年齢も文化を特殊づける要因となっているが、本調査は大学生を対象に行っているため、年齢の要因は分析の対象から排除した。なお、性別の要因も今回の調査が女性に偏っていたため分析の対象から外した。

DCT の内容の構成にあたっては、「教授」や「先輩」、「後輩」、「友人」など、大学生という身分を十分考慮した場面設定を行っているが、その一部を紹介すると<表 2>の通りである。

<表 2> DCT の構成内容²

社会的地位	親疎関係	状況	問
上 (教授)	親	授業時間に親しい教授に旅行の土産として買ってきた菓子を渡した。(贈り物)	1
	疎	授業時間にあまり親しくない教授に旅行の土産として買ってきた菓子を渡した。(贈り物)	2
同 (友人)	親	親しい友人に昼食をご馳走した。(食事のご馳走)	3
	疎	先日世話になったあまり親しくない友人にお礼の意味で昼食をご馳走した。(お礼の食事のご馳走)	4
下 (後輩)	親	親しい後輩に昼食をご馳走した。(食事のご馳走)	5
	疎	先日世話になったあまり親しくない後輩にお礼の意味で昼食をご馳走した。(お礼の食事のご馳走)	6

4. 分析結果

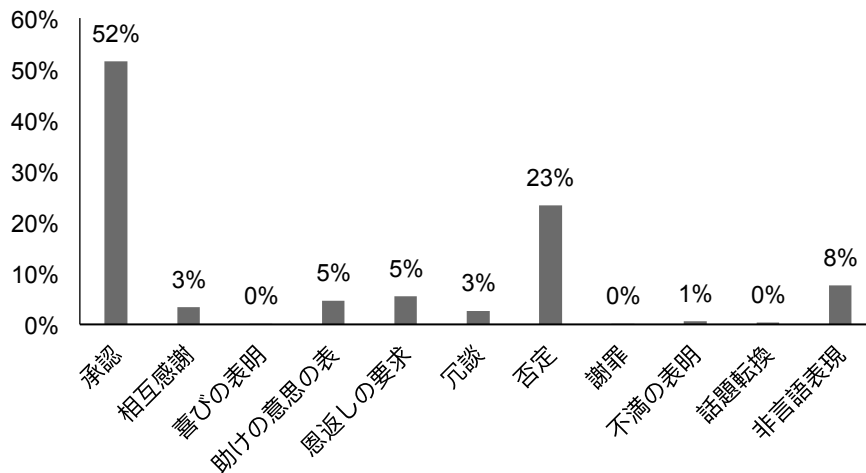
本章では、収集した DCT に基づいて、韓国人大学生が場面や状況に応じて、どんなストラテジーをどのように用いているのかについて分析を行う。特に、同じ場面であっても、社会的地位や負担程度、親疎関係などの社会的変因によるストラテジーの変化について注目しながら分析を行った。

4.1 集団による分析

本節では、感謝の状況で韓国人大学生がどのように応答しているのかを、談話ストラテジーという観点から分析した。<図 1>のように、韓国人大学生に多く選択されている応答は、承認(52%)>否定(23%)>非言語表現(8%)>助けの意志の表明=恩返しの要求(各 5%)>相互感謝、冗談(各 3%)>不満の表明(1%)の順であった。

²<表 1>に従って、「自分からの自発的な好意によるもの」と「相手からの依頼によるもの」にそれぞれ分けて場面設定を行っているが、「相手からの依頼によるもの」は紙面の都合で省いた。

How Korean Students Respond to Gratitude



<図1> 感謝表現に対する韓国人大学生の応答ストラテジー

<図1>で見られるように、韓国人大学生は感謝に対する応答ストラテジーとして、承認、相互感謝、喜びの表明、助けの意志の表明、恩返しの要求、不満の表明、頷きや微笑みなどの非言語行動といった「受けとめ」表現と、否定、謝罪、冗談、話題転換といった「否認」あるいは「ごまかす」表現をそれぞれ用いていた。各ストラテジーについて具体例をあげると、「受けとめ」に最も多く見られる承認とは、「응.(うん。)」、「그래.(はい。)」など、相手の感謝を素直に受け入れる表現を言う。DCT項目に食事をご馳走する内容があったため、「많이 먹어.(たくさん食べて。)」といった、食事に関連する表現が多数見られる。次に、相互感謝とは、相手側からの感謝の言葉に再度感謝の言葉で対応する場合で、相手に助けてもらったことに対する恩返しの際に頻繁に用いられている。「그때 도움이 많이 됐어.(あの時はとても助かったよ。)」、「네가 해 준 거에 비하면 아무것도 아니야.(君がしてくれたことに比べると何でもないよ。)」などがこれにあたる。喜びの表明とは、「도움이 됐다니 다행이야.(役に立ったなんてよかった。)」のように、自分の行動が相手側に役立ったことに対する喜びを表現するものである。なお、助けの意思の表明とは、相手側の感謝に対して今後も助けの意思があることを示す表現で、「다음에도 도움 필요하면 말해.(また助けが必要だったら言ってね。)」、「다른 거 또 할 것은 없나요?(ほかにやることはありますか?)」などがこれにあたる。一方、相手からの感謝に対して、依頼された内容が大変だったことを示す「힘들었어.(大変だったよ。)」、「진짜 힘들었어요.(本当に大変でしたよ。)」など、不満の表明によって自分の功を強調するストラテジーも見られる。これは教授の依頼でデータを検索したり、友人の依頼で翻訳を手伝うなど、負担程度が高いとされる場面で用いられている。親しい関係では、相手に施した恩恵に対して恩返しを要求するストラテジーも見られる。「한턱 쏘라~.(おごって~。)」、「커피 쏘라~.(コーヒーおごって~)」、「고마우면 밥이나 사라.(ありがたいならご飯でもおごって。)」など、お茶やご飯をご馳走を要求する表現が多い。「답에 니 차례.(次は君の番だよ。)」のように、恩返しの時期まで具体的に示した例もある。ご飯をおごるという行為は韓国社会では頻繁に行われることで、恩恵を施した相手にご飯をご馳走することは珍しくない。また「언제 밥이나 같이 먹자.(今度ご飯でも一緒に食べよう。)」や「시간 되면 차나 하자.(時間があればお茶でも飲もう。)」という表現は韓国社会で挨拶代わりに使われるほど、ご飯やお茶を一緒にするという行為は人間関係の構築に重要な手段でもある。従って、恩恵を施したことによって生じた人間関係の不均衡を解消する方法として、ご飯やお茶という、軽い恩返しを要求しているのである。しかし、ご飯をおごり合う文化が一般化していない日本人にとっては、自分の感謝に対して恩返しを要求する表現が失礼で不愉快に響くこともあるだろう。

相手からの感謝に対して非言語行動で応答する場合も想定し、DCTの内容に「もし言葉にせずに態度で表現する場合はどのような態度をとるか書いてください。」という項目を設けて調査

How Korean Students Respond to Gratitude

を行った。その結果、韓国人大学生は「미소(微笑み)」、「살짝 미소(軽い微笑み)」、「웃음(笑い)」、「끄덕끄덕(相づち)」などの非言語行動を行っているとは回答した。

一方、相手からの感謝を「否認」または「ごまかす」表現のうち、最も多く見られたのは否定である。自分が相手に施した恩恵は感謝されるほどではないと縮小あるいは否定する戦略で、「뭘~(何を言ってるのよ。）」、「에이, 별 거 아니야.(大したことじゃないよ。）」などがこれにあたる。そのほか、「더 좋은 거 못 드려서 죄송합니다.(もっと良いものを差し上げられず申し訳ありません。）」のような謝罪表現も1人から見られた。さらに、感謝表現に対して、「감사하면서 먹어라.(感謝しながら食べてね。）」、「이거 조공하는 거예요.(これ貢物だよ。）」といった冗談で言い返したり、「수고해~(お疲れ様~。）」のように話題を切り替える戦略も選択されている。

4.2 場面による分析

前節では、感謝場面においてどのような応答戦略が韓国人大学生に多く選ばれているのかを述べた。ここでは、同じ場面でいくつかの異なる状況をそれぞれ設定した DCT の調査結果に基づいて、状況によって韓国人大学生はどのような戦略を選択しているのかについて分析を行う。場面の設定にあたって、本稿では、「自分からの好意で恩恵を施した場合」と、「相手からの依頼で助けてあげた場合」に大別し、さらに各場面を社会的地位、親疎関係、負担程度などの社会的変因を考慮したいくつかの状況に分けて分析を行った。

4.2.1 自分からの好意で恩恵を施した場合

これは、相手から何も頼まれていないが、自分から好意を持って相手に物質的な恩恵を提供する状況である。ここでは、(1)好意で贈り物をあげた場合、(2)好意で食事をご馳走した場合、(3)好意でお礼の食事をご馳走した場合に場面を分け、それぞれの場面を社会的地位(上、同、下)と親疎関係(親、疎)により分析した。調査対象である大学生の場合、物質的な好意は負担のない範囲で行うと想定し負担程度の軽い状況を設定したため、負担程度による分析は省いた。

4.2.1.1 好意で贈り物をあげた場合

授業時間に自分より社会的地位の高い教授に旅行の土産で買って来たお菓子を渡した状況を設定し、教授との関係を、親しい場合と親しくない場合に分けて、それぞれどのように応答しているのか書いてもらった。

1. 授業時間に()に旅行土産で買って来たお菓子を渡しました。

(親しい教授)「ありがとう。いただきよ」 私: _____ (問1)

(あまり親しくない教授)「ありがとう。いただきよ」 私: _____ (問2)

この状況で韓国人大学生に多く選択された戦略は、教授との関係が親しいのか、親しくないのかに関係なく、「承認>否定>非言語表現」の順であった。親しい場合は63%、親しく無い場合は73%と、相手の社会的地位が自分より高い場合でも「承認」の戦略を多く選択しているが、これはお菓子のように負担程度がそれほど大きくないということも要因として働いていると考えられる。

4.2.1.2 好意で食事をご馳走した場合

アルバイト代をもらって、親しい友人や後輩に好意で昼食をご馳走した状況を設定し、それぞれどのように応答しているのか書いてもらった。

How Korean Students Respond to Gratitude

2. 今日アルバイト代をもらいました。私は気分がよかったので、学食で()に昼ご飯をご馳走しました。
(親しい友人) 「いただきます」 私: _____ (問3)
(親しい後輩) 「いただきます、先輩」 私: _____ (問5)

この状況で、韓国人大学生に多く選択された戦略は、「親しい友人」の場合は「承認(65%)>恩返しの要求(20%)>冗談(8%)>非言語表現(5%)」の順で、「親しい後輩」の場合は「承認(88%)>否定(5%)>恩返しの要求、非言語表現(各 2%)」の順であった。「親しい友人」からの感謝なのか、「親しい先輩」からの感謝なのかによって、韓国人大学生に好まれている戦略は異なっている。例えば、「親しい友人」の場合、「承認(65%)」の次に、「다음엔 네가 사라~(次は君がおごってね~。)」といった「恩返しの要求」が全体の 2 割を占めるなど、かなり高い割合で選ばれているが、「親しい後輩」に対しては「恩返しの要求」が 2%と、大幅に下がっている。その代わりに、「承認」の割合が高くなっており、「親しい後輩」からの感謝に対する「承認」は 9 割弱を占めている。そのほか、「親しい後輩」に対しては、「親しい友人」に全く見られなかった「否定」の戦略も表れている。

4.2.1.3 好意でお礼の食事をご馳走した場合

お世話になったあまり親しくない友人や後輩にお礼に昼食をご馳走する状況を設定し、それぞれのように応答しているのか書いてもらった。

3. 数日前に世話になった()にお礼の印に昼ご飯をご馳走しました。
(あまり親しくない友人) 「いただきます」 私: _____ (問4)
(あまり親しくない後輩) 「いただきます、先輩」 私: _____ (問6)

この状況で、韓国人大学生は「承認>相互感謝>否定>非言語表現」の順で感謝への応答戦略を選択している。友人に対しては 56%、後輩に対しては 65%と、「承認」の戦略が過半数以上を占めている。そのほか、「아니야, 내가 고맙지.(いや、僕こそありがとう。)」など、「相互感謝」の戦略もそれぞれ 24%と 16%と多く選ばれているが、これは今回実施した DCT の場合、ほかの状況では全く見られなかった。「相互感謝」という戦略は、Brown & Levinson(1987)のポライトネス理論によると、相手と一定の距離を置く「ネガティブ戦略」といえよう。つまり、親しくない相手からの感謝には、その感謝を素直に受け止めることにとどまらず、感謝で言い返すことによって相手と一定の距離を保つ戦略をとっているのである。

4.2.2 相手からの依頼で助けてあげた場合

相手から頼まれて助けてあげた状況で、社会的地位(上、同、下)、親疎関係(親、疎)、負担程度(大、小)のような社会的要因を考慮して以下の質問を行った³。

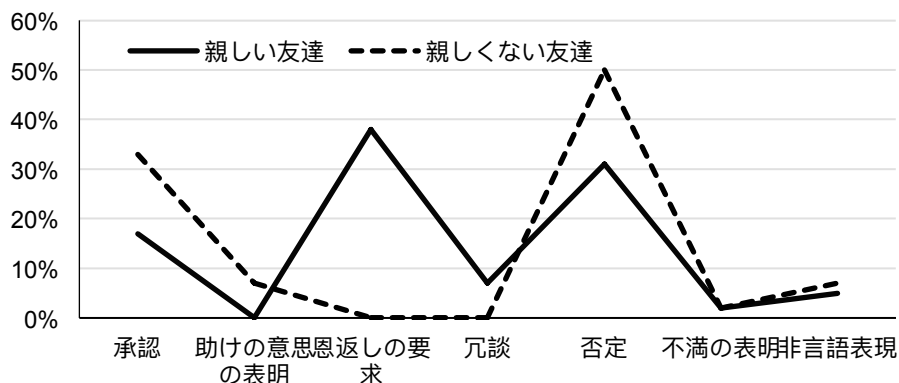
³ 紙面の都合上、有意な分析結果を持ついくつかの分析のみを提示している。

How Korean Students Respond to Gratitude

- 4.()が資料の収集を助けてほしいと言ったので、数日間資料を探して持っていきました。
 (親しい教授)「ご苦労様」 私: _____ (問7)
 (あまり親しくない教授)「ご苦労様」 私: _____ (問9)
- 5.()が資料をコピーしてきてと言ったので、コピーして持っていきました。
 (親しい教授)「ありがとう」 私: _____ (問8)
 (あまり親しくない教授)「ありがとう」 私: _____ (問10)

上記項目のように、自分より社会的地位の高い教授の依頼で助けてあげた場合、負担程度によって韓国人大学生が駆使する戦略は異なっている。例えば、負担の大きい依頼を受けた場合は「否定(42%)」が、負担の小さい依頼については「承認(60%)」が、それぞれ最も多く見られた。また、「다른 거 또 할 것은 없나요?(他に何か手伝うことはありますか?)」のような「助けの意思の表明」は、親疎に関係なく、負担の大きい場合に高くなっている。

一方、自分と社会的地位が同じである友人から負担の大きい依頼を受けて助けてあげた場合⁴、<図2>のように親疎関係は感謝への応答に影響する重要な要因として働いている。例えば、親しい友人には「한턱 쓰라~.(おごって~。)」といった「恩返しの要求(38%)」が用いられているのに対して、親しくない友人には「否定(50%)」の戦略が最も多く選ばれていた。さらに、この状況で親しくない友人には「助けの意思の表明(7%)」という戦略がとられているのに対して、親しい友人には「冗談(7%)」の戦略がそれぞれ使われていた。なお、「非言語表現」も負担程度や親疎関係によって影響されており、負担が少なく親しくない間柄の場合ではより高くなっている。



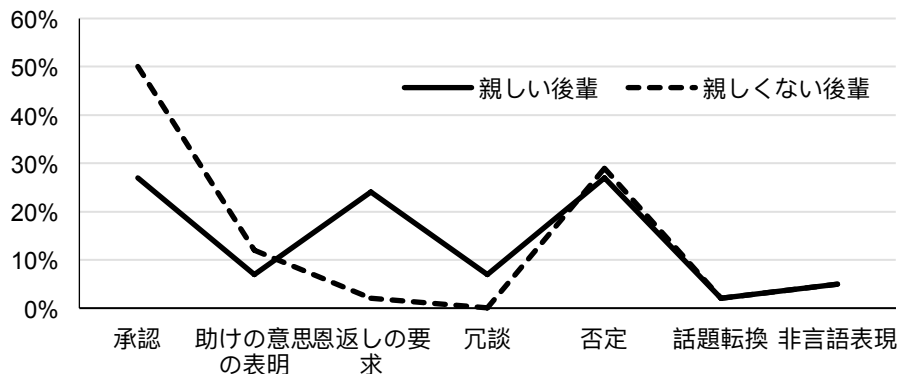
<図2> 依頼を受けて助けてあげた状況の感謝応答戦略(問11)&(問13)

自分より社会的地位が低い後輩から負担の大きい依頼を受けて助けてあげた場合、<図3>のように、韓国人大学生に最も多く選択されているのは「承認」の戦略である。親しい後輩から負担の大きい依頼を受けた場合、「否定(27%)」と「恩返しの要求(24%)」が「承認(27%)」とほぼ同じく、高い割合で選ばれていた。ただし、「恩返しの要求」は、<図2>で提示した、親しい友人から依頼を受けた場合に比べると、かなり低い頻度で選ばれている。また、親しくな

⁴ 同じ授業をとっている親しい友人、又はあまり親しくない友人に、英語資料の翻訳を助けてもらうという感謝場面を設定し、どのように応答したのか書いてもらった。

How Korean Students Respond to Gratitude

い後輩に対しては、「承認(50%)」と「助けの意思の表明(12%)」が、親しい後輩には「冗談(7%)」が多く選ばれるなど、親疎関係に強く影響されていることがわかる。



<図3> 依頼を受けて助けてあげた状況の感謝応答戦略(問15)&(問17)

5. 考察

前章では、韓国語の感謝表現に対する応答に関連して、韓国人大学生は場面や状況に合わせてどのように使い分けているのかを、DCTの質問項目をいくつか取り上げて分析結果を提示した。

まず、<集団による分析>では、韓国人大学生は「承認」、「否定」、「非言語行動」を感謝への応答として高い頻度で選択していた。「否定」は、相手の負い目を軽減または相殺することを目的に、自分の施した恩恵を縮小あるいは否認するために駆使する戦略である。Kim(2013)ではこれについて韓国社会で美德とされる「謙遜」が働いた結果であると述べている。また、日韓とも軽い会釈や微笑みなどの「非言語表現」が「否定」に続いて頻繁に見られている。Kim(2016)では、どのような状況で「非言語表現」が現れるのかについて、謙遜を示す場合もあるが、感謝の負担程度がごく軽くあえて言葉で表現する必要がない場合、あるいは相手とあまり親しくないため、会話を発展させず終了するための手段としても使われていると述べている。今回の調査によると、負担程度の低い場合、非言語表現が頻繁に用いられているが、親しくないという設定については、話し手にとって「ソト」の人なのか、それとも全く他人の「ヨソ」の人なのかによって異なる可能性があるため、さらに深い分析が必要と考えられる。

次に、韓国人大学生では、自分と親しい関係にある友人や後輩に対しては、「恩返しの要求」の戦略が多く見られた。「恩返しの要求」は日本の人々にとって失礼に聞こえる可能性もあるが、金・呉(2020)でも述べたように、相手に負担の大きい依頼をして助けてもらった場合、日本では「助かりました！」など、相手側の役割を強調するお礼の言葉で十分だと認識する傾向があるのに対して、韓国では言葉だけでなく、食事をご馳走したり、後日に贈り物をするなど、物質的に恩返しをする傾向が強い。これを裏返すと、韓国では、「相手から負担の大きい依頼を受けて助けてあげた場合」、相手への「恩返しの要求」はさほど失礼な行動ではなく、自然に受け入れられる程度の言語行動であると解釈できるだろう。なお、相手と親しくない場合や負担程度が低い場合は全く選択されておらず、親しい友人から負担の大きい依頼を受けて助けてあげた場合のみ選択されたこの戦略は、韓国人大学生にとって、負い目のバランスを調整するためのポジティブ・ポリトネス・戦略として働いていることがわかる。

さらに、<場面による分析>においては、同じような場面や状況でも、社会的地位や親疎関係、負担の程度といった社会的変因に応じて、戦略がどのように変わるのかについて分析を行った。その結果、親しい友人や後輩に好意で食事をご馳走した場合、韓国人大学生は、相手に

よって感謝に対する応答を使い分けていた。親しい友人には、「恩返しの要求」と「冗談」が、親しい後輩には「承認」と「否定」のストラテジーがそれぞれ多く選ばれているが、この結果から、韓国社会では年齢などの上下関係が感謝への応答に影響していることがわかる。上下関係による使い分けは、「恩返しの要求」ストラテジーにも如実に現れる。親しい友人には「다음엔 네가 사라.(次は君がおごって。)」のように恩返しを要求するストラテジーが高い頻度で選ばれているが、親しい後輩に対しては「自分は目上の人である」という意識が働き、「恩返しの要求」は選択されておらず、その代わりに、相手の感謝を軽く受け入れたり、相手への食事のご馳走はそれほど大したことではないという意味での「否認」のストラテジーが選択されている。一方、あまり親しくない友人や後輩に好意でお礼の食事をご馳走した場合、「承認」と「相互感謝」のストラテジーが多く選ばれていた。なお、相手からの依頼で助けてあげた場合、韓国人大学生は「否定」のストラテジーを多く選んでいたが、負担の大きい依頼を受けて助けてあげた場合は、社会的要因に応じて異なるストラテジーを選択していた。例えば、自分より社会的地位の高い教授には親疎関係にかかわらず「否定」を、親しい友達には「恩返しの要求」を、親しくない友達には「否定」を、後輩には「承認」と「否定」をそれぞれ高い頻度で選択している。即ち、目上の人に対しては、たとえ自分の負担が大きかったとしても、恩返しを要求するようなことはせずに、自分のパフォーマンスは大したことではないということを述べるなど、「謙遜」のストラテジーがとられているのがわかる。一方、親しい友人に対しては格式ばったよそよそしい表現は用いられず、主に「밥(ご飯)」と「차(お茶)」のように、相手側にそれほど大きな負担ではないと想定される物質的な補償を要求し、相手との関係に生じた不均衡を調整しようとする。さらに、負担が大きい依頼を受けて助けてあげた場合、「다음에 도움이 필요하면 말해.(今度助けが必要なら言ってね。)」など、「助けの意思の表明」のストラテジーも頻繁に見られる。そのほか、韓国人大学生は負い目によって偏ったバランスを取り戻すために、親しい関係では「冗談」などのポライトネス戦略がとられていた。

6. 結論

本稿では、韓国語母語話者が感謝表現に対してどのような応答を行っているのかを調べるために、DCT の手法で韓国人大学生を対象に調査を行った。感謝の場面や状況を細かく設定し、社会的地位、親疎関係、負担程度といった社会的変因を考慮して作成した DCT の分析の結果、韓国語の教材で一般的に見られる「천만에요.(どういたしまして。)」のような表現は全く表れず、教材に紹介されている「아니에요.(いいえ。)」以外に、場面や状況に応じて「非言語表現」を含めた様々なストラテジーが選ばれていた。特に、「恩返しの要求」のように、日本人々にとっては失礼な行為と誤解される余地のある表現が見られた。ただ、同じ場面や状況においても、社会的要因によって異なるストラテジーが選ばれているため、韓国語学習者は場面や状況、社会的要因などを十分に考慮して表現を使い分ける必要がある。

感謝場面における言語行動は日常的に行われる儀礼であり、韓国語学習者にとっての重要度は高いといえよう。従って、今後の韓国語教材において感謝場面における言語表現を提示する時には、状況や社会的要因も十分反映させる必要がある。日本語と韓国語は文法的に似通っているため、日本人韓国語学習者は日本語を直訳してそのまま使う傾向がある。しかし、状況と親疎・上下関係によって適切な表現を駆使できなかった場合、誤解が生じてしまい、相手に不愉快な思いをさせてしまう可能性もある。

本稿は、日常生活での自然談話を研究対象にしていなかったため、実際の言語使用においては本稿の分析結果と異なる結果が導き出される可能性もある。なお、大学生を調査対象にしたため、年齢によってどのように使い分けられているのかについても今後改めて調査を行う必要がある。なお、韓国語のみを対象としているため、日本語との対照的な観点からの研究も必要である。今後、本稿の成果を踏まえ、このような点を改善することにより、感謝に対する応答表現の研究を進めていきたい。

How Korean Students Respond to Gratitude

引用文献

- Bak, Eun Young (2000). *A Study on the Speech Acts of Apology and Thanks Response of English Korean Learners and Korean*. Unpublished Thesis: Ewha Womans University.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. New York, NY: Cambridge University Press.
- Coulmas, F. (1981). Poison to your soul: Thanks and apologies contrastively viewed. In F. Coulmas(Ed.), *Conversational routine: Explorations in standardized communication situations and prepatterned speech* (pp.69-91): THE Hague: Mouton.
- Kim, Jin-Moo (2013). Analyse pragmatique de l'acte de remerciement, *Etudes de la Culture Française et des Arts en France* 45. pp.61-103.
- 金明熙・呉恵卿(2020)「日・韓における大学生の感謝表現の比較研究」教育研究 62. pp.1-20.
- Kim, Yeong Chae (2016). *The aspects of the responses to gratitude expressions in Korean*, Unpublished Thesis: Hongik University.
- Pyun, Danielle Ooyoung (2007). Pedagogical Application of Corpora –A Speech Act Analysis of Responses to Thanks in Korean-. *Korean Language Education*. 18(2), pp.135-154.